

ドナー経験から

——骨髄移植ドナー登録者数の日米差について——

溝部明男

年末から一月にかけて、ニューヨークに滞在する機会があった。在米の従兄弟が白血病で、移植をすることになり、その縁故ドナーを筆者が引き受けたのである。筆者に適用されたのは、幹細胞（血球のもとになる細胞）を、骨髄からとる「骨髄移植」ではなく、血液から遠心分離装置で採取する「末梢血幹細胞移植」であった。日本では前者のみが一般的であるが、アメリカでは加えて後者の方法がこの二、三年で急速に普及してきたという。この後者の方法は、麻酔の必要もなく安全度の高い方法であるので、日本でもそのうち普及するだろう。

この移植は残念な結果に終わってしまったが、この体験を通して気づいたことのいくつかをお伝えしたい。

「ドナー登録者数の日米差」ある資料によると、骨髄バンクへの登録者数はアメリカで二百四十万人、日本では七万九千人である（アメリカでは National Marrow Donor Program の、日本では「骨髄移植推進財団」の登録者数）。（こ

こでは単純化のためにドナー登録団体の歴史の違いを無視し、また採取法は骨髄液採取のみとして考えることにする。）登録者数のこの大きな差は、どういうわけだろうか。以下、その説明のための研究プランの下書きをつくるつもりで考えた。

「分析単位」分析の単位は、(1)個人、(2)県や州、(3)国がありうる。ここではまず、個人を分析単位にして仮説を考えよう。

「被説明変数」ドナー登録の有無、あるいは（登録有りの回答はほとんどないことが予想されるので）この制度の説明をした後で「今後一年以内に、ドナー登録を行う可能性」を尋ね、それを被説明変数にしよう。

「仮説一」「ドナー」とつての危険性を高く認識する人ほど、ドナー登録を行う可能性は低い」（危険度の認識）

アメリカに出発する前に久しぶりに会った知人に、ドナーになるかもしれないと話したところ、「じゃあ、もう会えなくなるかもしれない」という返事が返ってきた。ドナーにとっての危険をどの程度と受けとめるか、筆者の身近な範囲に限っても、かなり個人差があるように感じられた。

この背景に、「知識の正確さ」が影響しているかもしれない。筆者の同僚でも「脊髄」と「骨髄」を混同する人がいた。

参考までに、麻酔の事故の危険性について、日米双方のパンフレットでどのように説明されているか、引用しよう。「骨

髓移植推進財団」のパンフでは、一九五〇年から一九九二年までに全世界で四万件以上の骨髄移植が行われ、ドナー死亡例は二件（イタリアと日本）、「非常に低い確率とはいえ致命的な事故が起きることがあります」と書かれている。

アメリカのNMDPのパンフでは次のようである。

As with any procedure involving anesthesia, there is a minimal amount of risk. The chances that a complication would arise from a narrow donation are very low.

数字は出さずに、危険はとても低いという書き方である。

（日本の書き方は事実にもした表現なのだろうが、ドナーになるために出発する日が迫ってくるにつれ、相当なプレッシャーになってくるのを実感した。）

〔仮説二〕「困っている人からの具体的な援助要請には応えるべきだ、という規範を身につけている人は、そうでない人よりドナー登録の可能性が高い」（規範意識）

ドナー登録の有無は、「そうすべきだ」という感覚を既にもっているか否かによるのであり、その感覚は規範の内面化の結果であろう。アメリカでは、その種の規範を身につけている人が多いという仮説である。

規範レヴェルに限ることができるとか、それとも価値レヴェルも含めて考えるべきか、迷うところである。

「日本海重油汚染」の除去作業に多くのヴォランティアが参加しているが、「阪神大震災」の際のヴォランティアの活

動ぶりに、「自分もすべきだ」と影響されたせいだという説がある。これは、規範の形成を重視した考え方であると思う。〔仮説三〕「骨髄移植の関与者を身近な範囲に多く持つ人ほど、ドナー登録の可能性が高い」（他者の行動の影響）

身近なところに経験者がいれば、危険度の認識、知識の正確さに影響が及ぶであろうが、それらとは独立にこの変数を考えたい。分析レヴェルを地域にあげてこのことを表現すれば、登録者数がある程度多くなれば、どんどん多くなるだろう、ということになる。

なぜそうなるかの説明は、模倣がなされている、あるいは規範の形成が促進された、という二通りが可能であろう。

重油汚染の場合、地元から出るヴォランティア達は町内会や所属団体でまとまってゆくことが結構あるようだ。まわりから声をかけられて、同じ行動をするというパターンである。集団主義的な傾向の強いところでは、ヴォランティア数増大の主要なメカニズムなのかもしれない。

〔仮説四〕「家族の同意を重視する人ほど、ドナー登録の可能性が低い」（個人主義的意思決定）

自分ひとりの考えで登録するのか、それとも、家族なり誰か他者の同意を登録の不可欠の条件と考えるか、という問題である。ドナーになることへの態度が人によって著しく異なる状況では、家族の了解を必要と感ずる人ほど、登録の可能性は低くなるだろう。登録を考慮する意思があるか、という

問に Yes と答える確率がひとりひとりで同じと仮定しても（いいかえれば、前記三変数の値がすべて同じと仮定しても）、小集団的な共同の意思決定を重視する地域では、個人主義的な意思決定を重視する地域よりも、実際の登録に結びつく行動の出現する確率は低くなるだろう。

筆者の場合、両親サイドからの反対の声が強く、その対応にかなりのエネルギーを費やさなければならなかった。帰国後には、事前の連絡をしなかった兄から知らせておいてほしかったといわれた。そんな経験の後にある本を読んでいて、個人主義的な意思決定の根づいているところでない、この種の登録者がふえるわけがない、と思った。

ちなみに、日本では「家族の同意」を得られることが、ドナー登録の必要条件になっている（年齢制限は二〇～五〇才）。NMDPにはそのような条件はない（年齢制限は一八～六〇才）。

ドナー登録者数の日米差について気づいたことを、調査票をつくるための仮説という形式を借りて述べた。筆者の職場では調査実習の担当が四年に一度まわってくる。九六年度がちょうどその年にあたって、その影響がぬけきれていないせいかもしれない。

* 紙幅の都合で参考文献を省略した。

(みぞべ あきお・金沢大学文学部人間学科)